

## ご 挨拶

### 「学会と地域貢献」

#### 会長 志手 典之（北海道教育大学岩見沢校）



昨年度は、理事長を始めとする多くの役員の皆様に支えられ、順調に学会運営をすることができました。二期目の最終年度となる平成29年度は、次期の運営体制にスムーズにバトンタッチできるような年度にしたいと考えます。

今年度は臨時総会の在り方を再度検証し、多くの会員の方の参加を促せるような仕掛けを模索していければと考えております。現在、大学では「評価」担当副学長という立場で本部執務をしており、大学運営に対してどのようにPDCAの好循環サイクルを組み入れるかという仕事をしております。本学会に

においてもPDCAを意識し、常に新しい一步を踏み出せるように運営が出来ればと思います。学会組織も日々、その形を変え、北海道体育学会は日本体育学会の支部組織ではなくなります。独立した協力団体ということになり、更に学会としての「自立+自律」が求められます。役員、そして学会員の皆様が共同し、より素晴らしい北海道体育学会を築きあげられればと思います。

平成28年度の学会大会では、酪農学園大学には、大変お世話になりました。ノン・アルコールの懇親会も、よいものですね。来年度は、42年ぶりの帯広開催となります。帯広の美味しいものを楽しみにしたいと思います。

### 「師走に想う組織のあり方」

#### 理事長 神林 勲（北海道教育大学札幌校）



最近、昔読んだ本を読み返した。福岡伸一著「動的平衡-生命はなぜそこに宿るのか-」(木楽舎)である。出版された当時（2009年）、それなりに話題になったのでご存じの方も多いと思う（ちなみに「動的平衡2」も2011年に同社より出版されている）。

生命現象の定義に「動的平衡(dynamic equilibrium)」という概念を取り入れることを提唱し、生命を「可変的でありながら永続的（サステナブル）なシステム」ととらえている。つまり、著書から引用（233頁）すれば、「一輪車に乗ってバランスを保つときのように、むしろ小刻みに動いているからこそ平衡を維持でき、（一部省略）動きながら常に分解と再生を繰り返し、自

分を作り替えている。それ故に環境の変化に適応でき、（一部省略）何かを物質的・制度的に保存したり、死守したりすることではないのがおのずと知れる」ということだ。

少々、飛躍的になるが、生命と人間社会の組織も類似性が高いのではと感じる。元サッカー日本代表監督の岡田武史氏も、「強い組織（チーム）とは神経が通い合う1つの生命体」と述べていた。学会組織も「可変的でありながら永続的なシステム」でなければならないと思う。理事長の任期もあと一年余り。このような組織のあり方を念頭に、職務を全うできればと願う年末である。

## シンポジウム傍聴記

### 「学校およびトレーニング現場におけるスポーツ栄養の取り組み」

森 靖明（北海道札幌西高等学校）

私は今回初めて北海道体育学会へ参加させていただきました。これまでは道内の公立高校3校で勤務し、その後道教委で9年、そしてこの春久しぶりに学校現場に戻ったところであり、研究の世界とは無縁の人間だったのですが、この年になって何を思ったか、新たな世界を覗いてみようということで今回お邪魔させていただき、私ごときが畏れ多いと思いつつも、図々しく口頭発表までさせていただきました。

また、道教委に勤務していた際には、各種事業や有識者会議などで、当学会に所属する多くの先生方に大変お世話になりました。この場を借りまして、改めてお礼申し上げたいと思います。

さて、本題のシンポジウムですが、大会2日目の午前中最初のプログラムとして、酪農学園大学の研修館2階大研修室で開催されました。辻和哉先生（NPO法人アスリートネット）、平井英子先生（フリーランススポーツ栄養士）、滝澤一騎先生（一般社団法人身体開発研究機構）をシンポジストとして、山口太一先生（酪農学園大学）の司会によって進められました。終わってみればあっという間の90分間であり、本当に興味深い内容が盛りだくさんの有意義な時間でした。

はるばる関西からお越しいただいた辻先生からは、体づくりが十分できていないと走れないと考え、生徒にバナナやパンをたくさん食べさせていた高校教員時代の話から始まり、コーチとして大学の女子駅伝チームに関わる中で、下宿生と自宅生の環境の差により栄養摂取の仕方の違いがあることを感じた話や、トレーナーとしてラグビー日本代表チームに関わる中でのエピソードを中心に話題提供していただきました。練習直後の食事の内容の重要性や、食事とトレーニングとの関係、また、遠征先でのホテルと食事に関する交渉を行ったことや栄養士と意見を戦わせたことなど、さまざまなお立場を経験された辻先生ならではの非常に示唆に富む内容でした。

公認スポーツ栄養士である平井先生からは、コンディションの維持や試合時にパフォーマンスをピークにもっていくなどスポーツ栄養学の目的や、実際

に選手に関わる中で、食に関する意識と自己管理能力の向上を目指して具体的な目標を設定して1食の品数を増やすことや、スイーツの食べ方を指導するなど、競技のパフォーマンスを上げ、成長期の健全な発育・発達を促すためのアプローチについて、数多くの実践に基づく貴重なお話を伺うことができました。

滝澤先生からは、北海道大学において行った「食べて勝つプロジェクト」の取組について紹介がありました。食費にかけるお金があまりない学生アスリートの現状を踏まえ、大学生協とタイアップし、食品を栄養の働き別に赤・緑・黄の3つに色分けする3群点数法を用いて競技に応じた目標点数を示すとともに、生協食堂のレシートにその日の点数を表示して、学生向けの講習会で日頃の食事内容を点検するなど、日々の食事にあまり意識が向かない学生に対し、自らの食生活を直視させるユニークな実践を、軽快なテンポでお話しいただくとともに、知識的、金銭的に大学競技者にとって食事の自己管理は難しいのが現状であるとの課題もお示しいただきました。

後半のフロアの参加者との質疑応答も含めた中で、参加者全員が、パフォーマンスの向上や、健全な発育・発達、けがや故障の予防や回復などを考える上で、スポーツ栄養の重要性について再認識することができた、大変有意義なシンポジウムとなりました。

終わりになりますが、本大会を運営していただきました酪農学園大学の山口先生をはじめとした関係者の方々、そして貴重なお話をいただきましたシンポジストの先生方、多くの示唆に富むお話をいただきました口頭発表及びポスター発表を行っていただいた先生方、その他すべての関係者に改めて感謝申し上げますとともに、当学会の今後ますますの発展をお祈りいたします。ありがとうございました。

## 口頭発表傍聴記

### 越川 茂樹（北海道教育大学釧路校）

今年度の口頭発表は大会1日目に行われ、演題数は全部で21でした。そのうちの12演題が大学院生と学部生による発表でした。各自が様々な研究テーマと真摯に向き合い追究している姿勢がうかがわれました。また、大会関係者によれば、口頭発表の演題数が多くプログラムの組む上でうれしい悲鳴があがる学会大会であったようです。

さて、今回の口頭発表は全体を通してみると、子どもの体力をめぐる問題への関心に基づく研究が目立ちました。石原氏（北海道教育大学大学院）は、運動習慣および体格要因が体力を介して学業成績と関連することを北海道在住の中学1年生を対象とする調査により示されました。秋月氏（北海道医療大学大学院）の研究は、小学生における運動習慣と自律神経系活動との関連を探ったものでした。越智氏（北海道教育大学旭川校(学部生)）の「雪上運動による体力向上効果」、徳田氏（北翔大学）の「スノーゲームの開発 -身体活動量、心理的効果の側面から-」、塚本氏（東海大学）の「小規模特認校における体力づくりの取り組み」、吉川氏（北海道教育大学大学院）の『『サッポロサタデー スクール事業』におけるなわとび教室の実施に関する一考察」、ならびに須合氏（北海道教育大学附属札幌小学校）の「小学校6年児童を対象とした教育課程内における体力向上・生活習慣改善プログラムへの介入効果」は、いずれも子どもの体力向上について子どもの意欲を喚起させることが効果を高めるといった考え方に立った研究であったと思います。これらの一連の研究に対する質疑応答では、いかに実際の学校現場で実現できるのかといった点に関心の的でした。

また、体育の授業づくりに対する関心の高さもうかがわれました。竹花氏（北翔大学(学部生)）は中学校における現代的なリズムダンスの指導、梅田氏（北海道小平高等養護学校）は、高等特別支援学校におけるハンドボールの指導実践、森氏（北海道札幌西高等学校）は、高等学校におけるアクティブラーニングの取り組み、中島氏（北海道科学大学）は、小学校におけるコミュニケーションの形成状況の分析、そして高瀬氏（大谷大学）は、小学校複式学級における学年別指導を取り入れたネット型ゲームの事例を報告されました。これらの研究を通して、本学会の重要な使命の一つが、理論と実践の往還の場として貢献し

ていくことであると改めて感じました。

スポーツ指導に関しても多種多様な研究がみられました。小野地氏（北翔大学大学院）は初心者を対象とした屋内ゴルフ指導を大学の授業において実験的に行い検証され、沼田氏（札幌国際大学大学院）は、大学男子バレーボール選手におけるスパイク距離がキネマティック特性に及ぼす影響を、田尾氏（北翔大学大学院）は、テニスのサービスに対するリターン予測の正確性を検討されていました。大宮氏（北翔大学）は、大学女子走り幅跳び選手における競技記録の変遷と垂直跳び能力の変化の関係性について事例報告されました。板谷氏（北海道教育大学旭川校）は、野球内野手の送球技能を評価するパフォーマンステストの有効性を内野手と外野手の技能差の判別により検証されました。いずれの研究も今後の研究の発展が期待されるものでした。また、スポーツ指導の現場の問題にかかわる、金須氏（北海道大学大学院）のバスケットボール選手の足関節捻挫における自己管理に関する研究や佐藤氏（酪農学園大学(学部生)）の高校部活動の女子選手の栄養摂取状況と体力との関係に関する研究は、選手の自律的・自立的な競技生活の大切さを示唆するものであったと感じました。

さらに、山中氏（北海道教育大学大学院）の自閉症スペクトラム者におけるスポーツ活動参加に関する研究は見過ごすことのできない重要なテーマであり、沼倉氏（北海道大学大学院）の民族舞踊「荒馬」のヨーロッパ起源説に関する研究は、知の探究の大切さを気づかせてくれるものでした。さらなる研究の深化が待たれるところであります。

以上、簡単ではありますが口頭発表傍聴の記録とさせていただきます。



## ポスター発表傍聴記

須合 幸司（北海道教育大学附属札幌小学校）

今年度の学会では、2日目の午後にポスターでの研究発表が行われました。以下に、演題ならびにその内容について簡単に紹介させていただきます。

- 1) 「シニアスキーヤーのスキー実施が QOL に与える影響の分析」石澤伸弘先生（北海道教育大学札幌校）：スキー実施が及ぼす高齢者の生活満足度と主観的幸福度への影響を中心に、そこに隠れている背景も含めご紹介されました。
- 2) 「新しい動作を獲得するために必要な認知的方法に対する考察—新旧対照法を用いて—」伊藤真之助先生（札幌医療リハビリ専門学校 理学療法学科）癖のついた悪い動作の修正に有効とされる手法である新旧対照法 [Lyndon(1989)] を用い、新しい動作の習得にも有効かどうかの検証結果をご紹介されました。
- 3) 「校舎改築期でのなわとび運動による児童の運動量確保を目指す取り組みについて—その成果と課題に着目して—」上家卓先生（札幌市立中の島小学校）2年以上グラウンドが使用できないという課題を克服するために、小学校で行っている具体的な取り組みの成果と課題について紹介していただきました。
- 4) 「加速区間とトップスピード区間の中学生と高校生のピッチとストライド」宮崎俊彦先生（北海学園大学）中学・高校の男女陸上部の0-10 m、35-45 m区間での跳躍角等の疾走パラメーターの比較から最大疾走速度を高める要因について報告されました。
- 5) 「科学的データフィードバックから得られる選手の気づきとコーチング～オプトジャンプシステムによ

るスタート局面のデータより～」竹田安宏（札幌南高等学校）高校生のスプリンターに対して、科学的データを用いコーチングすることの効果について報告されていました。選手の動機付けに有効であり、課題解決に向かいやすくなる可能性が示唆されました。

- 6) 「大学基礎スキー部の心理的競技能力と競技成績の関連性について」吉田充先生（北海学園大学）男子大学生スキー部を対象に心理的競技能力診断検査 DIPCA.3（トーヨーフィジカル製）を用いた心理面と競技成績との関係性について報告されました。
- 7) 「アトピー性皮膚炎モデルマウスにおける脳内酸化還元バランスと抗酸化物質の摂取効果の非侵襲的評価」神林勲先生（北海道教育大学札幌校）皮膚炎発症などのストレス時に抗酸化物質を摂取することにより、脳内の抗酸化機構が破綻を来す前に、正常に戻せる可能性が示唆されました。
- 8) 「女子ラクロス選手に対する栄養サポート介入が栄養摂取状況に与える影響」東郷将成先生（酪農学園大学）栄養サポート介入を行うことで食事の摂取内容や栄養素比率の改善が図られるなどの成果や課題について報告されました。

技術面だけではなく、メンタル・栄養・生化学・社会学など様々な角度からの発表がありました。多様な価値観を持つ者同士がディスカッションすることによって、アイデアが浮かび、新しい見方に気付くことができた非常に有意義なポスター発表でした。



## 学会賞受賞者より

### 「学会賞をいただいて」

#### 木本 理可（旭川工業高等専門学校）

この度は、たいへん身に余る賞をいただき、誠にありがとうございます。本当に多くの方にご指導、ご協力をいただき、支えていただいたことを改めて実感しております。共同研究者の先生方やこれまでともに研究に携わってくださった多くの関係者の皆さまに心より感謝申し上げますとともに、この賞の名に恥じぬよう、より一層研究活動に精進して参りたいと思います。

授賞式の後に「論文を書き続けるモチベーションは何なのか?」ということを探ねられ、ふと振り返ってみると、これまで「もっと研究がしたい」という一心でやってきたように思います。教育大学での神林ゼミで過ごした日々が私の研究の原点であり、たいへん活力のある先輩方・後輩たちとの充実した研究生活の中で、研究の楽しさ、やりがいを知りました。運動という身近な対象に対しても、未だ明らかになっていないことは多くあり、自分たちがその未知なる真理に挑戦することで誰かの役に立つかもしれないという感覚は、私にとってたいへん大きな研究の魅力となりました。

大学院修了後は中学校教諭として勤めましたが、あの頃の経験が忘れられず、本格的に研究者の道に進みました。実際、現職に就いてみると、考えていた以上に学生指導等に追われてしまい、研究への時間の確保がままならないことも少なくありません。さらに、恥ずかしながら現在でも自身で研究環境が整えられているとは言い難い現状です。

そんな状況ではありましたが、時間が許す範囲で教育大のゼミに参加させていただいたり、継続的に共同研究にお声掛けいただいたりしながら、これまで研究者としてのアイデンティティを保ちながらやってきました。これは何より、周囲の方々のご指導、ご協力の賜物であり、自分は本当に幸せな研究者であると思います。また、そのような中で生み出された研究成果を何とか形にしたい、という思いで投稿してきたものが今回の受賞につながり、たいへん嬉しく感じています。

この北海道体育学会、そして機関紙である北海道体育学研究にも、研究者として育てていただいております。北海道の学会大会では、多くの先生方が様々な視点から、身近な課題の解決に真摯に取り組まれている

姿に、いつもパワーをいただきます。北海道の地域性を考慮した検討や、身近な先生方と忌憚のない意見交換が行えることは非常に有意義であり、全国学会には無い地方会ならではの良さであると思います。

特に最近では、大学院生をはじめとする若手研究者の皆さんの発表がたいへん素晴らしく、頼もしく感じるとともに、自分ももっと一つひとつの研究に向き合わなければいけない、と初心に戻る事ができる場となっています。また、北海道体育学研究では、査読者の先生方の唆に満ちたご指摘や温かいご助言のおかげで掲載に至った論文も多く、この学会誌だからこそ、書き続けることが出来たように思います。この場を借りて、編集委員や査読者の方々をはじめ、関係の皆様に深く御礼を申し上げます。

今回の受賞は、自分と研究について見つめ直す良い機会となりました。自分で望んだ環境に身を置いているにもかかわらず、「忙しい」と言い訳をして真摯に研究に取り組めていないことはないだろうか、もっともっと丁寧に結果を検討し、わかりやすく伝える努力ができるのではないかと研究者としての未熟さも実感しました。これからの日本、そして北海道において、健康の維持・増進における運動の役割は重要性を増してくると思います。

今後も微力ながらも研究を続け、これまで支えていただいた方々や自分が育ってきたここ北海道に恩返しができるよう、より有益な成果の社会還元を目指して取り組んでいきたいと思っています。この度は、誠にありがとうございました。





## 若手研究者賞を受賞して

### 「受賞の喜びと感謝」

沼田 薫樹（札幌国際大学大学院）

この度は、北海道体育学会 若手研究者賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄に思っております。本発表を学会関係者の皆様および、選考委員の方々から評価いただいたことを大変嬉しく思います。また、今回受賞対象となった研究は、私一人で出来るものではなく、小林秀紹先生や、研究室の同期、後輩、さらには各校バレーボール部の多大なる協力と支援があって成り立ちました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

さて、今回発表させていただいた「大学男子バレーボール選手におけるスパイク距離の違いにおけるキネマティクス特性」ですが、バレーボールのスパイク技能の一つであるコースへの打球（スパイク距離の長短の違い）において、どのような動作の違いがあるのかについて検証しました。スパイク距離の違いは肩関節角度の差異に現れ、ショートスパイクの動作はロングスパイクよりも肘が高い位置で打球していると考えられました。競技スポーツにおいて身体の動きを理解することは重要であり、本研究によって我々が得た知見が少しでもお役にたてれば幸いに存じます。

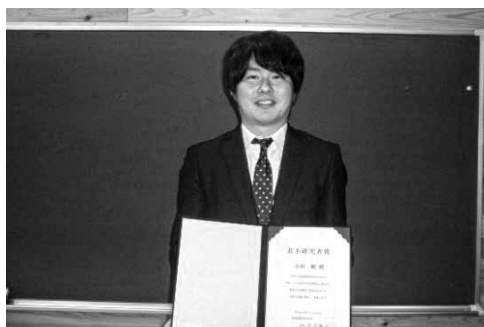
本大会では、体育・スポーツに関わる様々な分野の方々と交流する機会があり、大変有意義な時間を持つことが出来ました。これからの体育・スポーツの発展に向けて少しでも貢献できるよう、新しいアイデアの実現に向け、今後も努力を惜しまず研究を頑張りたいと思います。

最後に、この度の受賞の趣旨をよく理解し、この栄誉を糧に今後とも研究に全力を尽くす所存でございます。今後とも、ご指導・ご鞭撻を頂きたい、よろしく願い申し上げます。誠にありがとうございました。



### 「若手研究者賞の受賞から」

石原 暢（北海道大学大学院）



このたびは、北海道体育学会第56回大会において若手研究者賞を受賞させていただき、身に余る光栄です。選考委員の先生方に厚くお礼申し上げます。また、本研究を進めるにあたりご指導いただきました共同研究者の皆さまに感謝致します。今回の受賞に恥じぬよう、より一層研究に励む所存です。

受賞発表テーマである「運動習慣および体格要因は体力を介して学業成績と関連する」は、北海道在住の中学1年生274名を対象に行動学的要因（運動習慣、食習慣、睡眠習慣）と生理学的要因（体力・運動能力、BMI）および学業成績の関連を、社会経済状況で調整した上で包括的に示したものです。本

研究は北海道教育大学岩見沢校の森田憲輝先生と北海道科学大学の中島寿宏先生が主導で行ったもので、分析から携わらせていただき本学会で発表をさせていただきました。本研究により、体力・運動能力と学業成績の間に正の関連があること、運動習慣の形成・過体重の予防により体力を高めることは学業成績の向上に寄与することが示唆されました。

高度な経済成長に伴い、日本の子どもたちは身体的に不活動になっていることが懸念されています。運動が身体的健康に与える効果は過去の研究により明らかとされていますが、運動と子どもの脳の健康（例えば、認知機能や学業成績）の関連については十分検討されていません。本研究の結果は、身体健康のみならず、学業成績の向上にも運動が貢献していることを示すものであり、子どもに対して運動を行う新たなモチベーションを提言できるものだと考えられます。

研究者としての日が浅くまだまだ未熟ではありますが、今回の受賞を励みに体育・スポーツ科学分野のより一層の発展に寄与する研究を進めて参りたいと考えておりますので、今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。

## 北海道体育学会第 56 回大会を終えて

大会担当 山口 太一 (酪農学園大学)

11月19日(土)～18日(日)に本学研修館において第56回大会を開催させていただきました。総勢77名の方にご参加いただき、口頭発表21題ならびにポスター発表8題の一般講演、旭川工業専門学校の本本理可先生による学会賞受賞講演が行われ、活発な質疑応答も展開されました。本大会を盛会裏に終えられたのは、ひとえに参加された皆様のおかげでございます。心より感謝申し上げます。

本大会を引き受けてから、本学らしい大会にできればと思い、研究室の学生とともに企画を練ってまいりました。そのひとつが1日目の総会時に提供した学生考案の運動後のリカバリーを想定した弁当のご試食でございます。おにぎらずとライスバーガーのライスセット、ベーグルとサンドイッチのパンセットのいずれかを召し上がっていただきましたが、お口に合いましたでしょうか？皆様に回答いただいたアンケート結果をもとに弁当レシピを作成し、本学の運動部活動の学生にレシピを提供するとともに、調理実習を開催する予定でございます。

また、2日目のシンポジウムでは、「学校及びトレーニング現場におけるスポーツ栄養の取り組み」というテーマで、アスレチックトレーナーの辻和哉先生、スポーツ栄養士の平井英子先生、大学部活動の監督としてのお立場で瀧澤一騎先生より、これまでの取り組みについてお話いただき、会場の皆様とディスカッショ

ンをさせていただきました。学校ならびにトレーニング現場においてスポーツ栄養の取り組みは必要であるとのコンセンサスにつながっていれば幸甚でございます。

懇親会は例年とは異なり2日目の閉会后、アフターパーティーの形式をとり、会場はそのまま、ノンアルコールにて開催させていただきました。大学周辺に飲食店が少なく、本学構内が禁酒であることを考慮いたしました。料理は、本学ゆかりの食材を含んだ品を本学卒業生であるCLIMAの大久保大悟さんにご準備いただきました。いかがでしたでしょうか？

運営に関しては、不手際が多かったことをお許しください。何より交通の便が悪く、なおかつ構内が広いため会場がわかりにくく、ご不便をおかけしました。また、口頭発表の先生方におかれましては、プロジェクターが旧型であったため、多大なるご迷惑をおかけいたしました。改めて、お詫び申し上げます。次第でございます。

末筆となりますが、次回の帯広畜産大学で開催される第57回大会のご盛会を祈念しております。



## 研究委員会活動報告

研究委員長 森田 憲輝 (北海道教育大学岩見沢校)

研究委員会では例年通り学会賞の選考および若手研究者賞の選考を実施しました。本ニュースレターにも学会賞および若手研究者賞の受賞者からのコメントが掲載されていますのでご確認ください。

学会賞については、本学会機関誌への掲載論文数が規定数に達した方への授与となっていますので、今後も多くの会員に機関誌へ投稿して頂き、そして審査をクリアし、掲載まで辿り着いて頂ければ、今後も継続して授与者を輩出できると思います。論文文化は大変な作業ですが、これによって多くの会員の研究が進展し、それと伴に北海道の体育科学分野の発展、本学会の盛り上がりにつながれば、本委員会の本来の役割を果たせるのかなと思っています。

一方、若手賞ですが、審査では抄録と学会当日の口頭発表で評価しています。抄録審査をして気づくことは、結果にデータ、つまり結論を導くための根拠が記載されていないことがあります。「増加した」「差があった」との記載で留めずに「データ自体に結果を語らせて」頂ければと思います。人文社会科学系では数値を用いないこともありますが、それでも結果と結

論の整合性を評価できるよう記載して頂きたいと思います。今後直接的な指導だけでなく共同研究者として間接的に関与する際には、上記の点をご留意頂ければ、より充実した研究抄録になるように思います。

さらに論文文化を見据えると、私自身も査読の際に指摘されますが、研究目的のRationale(理論的根拠)やImplication(意義)を明確にせよとのコメントや、近年これらに加え、サンプルサイズの根拠(検出力)そして効果量(effect size)の記載を求められてきます。海外学術誌では「統計学的有意性」だけでなく、実質的な「有効性」にシフトしている傾向があり、若手への指導・助言においてもそれらを加味すると、研究データの「質」向上、現場に還元できる知見になるのかなと思っています。



## 編集委員会活動報告

編集委員長 石澤 伸弘（北海道教育大学札幌校）

今年の夏はリオオリンピック・パラリンピックで盛り上がりました。そして、それらの話題の締めくくりは、「次は、いよいよ東京！」というものが多かったような気がします。それだけ東京オリ・パラ 2020 が、われわれにとって大きな期待を背負うものであるといえるでしょう。

次の半世紀へ向けて新たなスタートを切った本誌第 51 巻には、多くの論文が寄せられ、その中の 9 編（研究ノート 5 編、実践研究 4 編）を掲載する運びとなりました。本誌の優れた点として、毎年、晩秋に開催される北海道体育学会の学会大会で発表したものをブラッシュアップし、その仕上げとして投稿するケースが多いということです。発表時に寄せられた疑問点や意見を吟味・再検討し、論文に反映させることで、そのクオリティーは格段の向上を見せることとなるでしょう。このスタイルを是非、これからも継続して参りましょう。そのためにも、これまで以上に学会大会で発表された会員の皆さまには発表を論文化し、本誌に積極的にご投稿いただきたいと思えます。編集委としては出来るだけ早い査読作業を進めて参ります。論文種別も多々ございますので、是非、奮ってご投稿下さい。

しかし、今回、査読を進めるにあたり「共著者」について幾つかの問題点が表面化したこともお伝えしなければなりません。1つ目は査読の最終段階で共著者が追加された事例と、2つ目は共著者が当該論文の投稿を知らなかった事例が確認された点です。

American Geophysical Union (AGU、アメリカ地球物理学連合) が発行する Journal of Geophysical Research: Space Physics の編集長を務める Michael Liemohn 氏（米ミシガン大学教授）は、自身のブログで類似した問題を取り上げ、同誌のポリシーを解説しています。それによりますと、同誌の規定では、共著者に加えることのできるのは、該当の研究に対して“significant”(重要)な貢献を果たした共同研究者に限るとされています。significant と

までは言えないが協力してくれた研究者がいれば、Acknowledgment(謝辞)で名前を挙げるのが妥当です。どのくらいの貢献を significant と判断するかは、論文の corresponding author(責任著者)に任されています。共著者の範囲が適切かどうかをわれわれ編集委員会が判断するわけではなく、著者の倫理的判断に委ねられているといえます。

同誌のポリシーでもう一つ重要なポイントは、すべての共著者が投稿論文に対する責任を負うということです。それに加えて責任著者は、共著者全員が論文原稿の最終版に目を通し、論文内容に同意していることを投稿時に宣誓するよう求められます。投稿を受けた AGU は、責任著者だけでなく共著者全員に向けて「あなたが著者になっている論文が投稿された」旨をメールで通知します。万一身に覚えがない場合は、「当事者間ないしは編集委員会を通じて速やかに解決する必要がある。」となっています。

ただ、ジャーナルや学会誌によって細部に違いはありますが、このように貢献度の違いにかかわらず、共著者を一律に扱うやり方が一般的となっている現状もあります。本誌は地方学会誌でもあり、現在のところはこの点についての規定は整備してはおりませんが、将来的には協議の必要性が求められるのかも知れません。しかしながら、「責任著者の倫理的判断」には大いに期待したいところです・・・。

末筆ではありますが、査読にあたりご協力を賜りました多くの先生方に、この場をお借りして感謝を申し上げます。ありがとうございました。





## (北海道と陸上競技)

大宮 真一 (北翔大学)

私は陸上競技一筋、小学校5年生から現在に至るまで生活から切り離されることなく来ています。職業としても陸上競技の研究をできているので、この上ないことだと思っています。

さて、私は2009年に北翔大学へ赴任して、今年度で8年目となります。出身は愛知県名古屋市で、愛知教育大学で学部・大学院、その後、筑波大学大学院を経て今日に至ります。北翔大学へ赴任するまでに、北海道には競技者時代に唯一2003年の全国教育系大学陸上競技大会 in 円山競技場に出場で訪れただけでした。一方、北海道に縁もゆかりもないと思っていましたが、私の母方の曾祖父が幼少時代に明治時代の開拓民として現八雲町へ入っているということがあったようです。先述したように北海道に移り住んでの8年はあっという間に過ぎ去り、自然豊かな大地の中で特有の活動ができることや、毎年違う顔を見せる冬の姿には驚くばかりでその天候には予

想もつかないことに大変興味を抱いています。

今年、札幌での初雪が例年より1か月も早く、12月に根雪となろうとしているので陸上競技においては早々に室内トレーニングへ移行せざるを得なくなりました。毎日のように指導現場と研究とが常に行き来しながら両側で前進するスタンス。自然科学における統計的に効果を示されている一般的トレーニング理論を用いる傍ら、反対に理論をある意味無視して新たなトレーニング手段・方法をコーチの目で日々確認・評価も実践しています。室内トレーニング環境が北欧の国々と比較したら活動スペースが制限されているため、何とかこの現状を打破できるように日々指導と研究に当たり、人々の運動における基礎は陸上競技に通じるものが多いので、この陸上競技を題材に北海道を活性化させることが究極の目標です。このような私ですが、今後ともよろしく願い申し上げます。

## (さみしがり屋にとっての研究)

上家 卓 (札幌中の島小学校)

私はさみしがり屋です。偉大な小出先生から話を受け、尊敬する高瀬先生からバトンを受け取ってこのリレーエッセイの執筆が決定した日から、内容をずっと悩んできました。どんな文章ならばニュースレターを読む皆さんに読み飛ばされずにすむのか。熟考した結果、この「さみしがり屋」という言葉で文章をスタートしました。この言葉が今の自分の状況を一番適切に表現していると思ったからです。

私は人と話したり、お酒を飲んだりすることが大好きです。逆に、自分以外の周りの人が仲良さそうに過ごしている、自分のわからない研究の話をしている…と途端にさみしくなります。そして「誰か自分にかまってくれ!」という気持ちがふつふつと湧いてきます。なんと器の小さい男なのでしょう。現在小学校の教諭をしているため教室では36人の子どもたちが絶えず話しかけてきます。「うるさいな」と言って邪険に扱いつつ、かまってくれるのでさみしがり屋

には幸せな時間です。

さて、学校現場に入って、改めて私を受け入れてくださる多くの方の優しさやつながりのありがたさを実感しています。そして、研究はさみしがり屋な私と多くの人をつないでくれる架け橋であり、研究を通して多くの人とつながりを保てていると強く信じています。例えば、北海道教育大学をはじめとする様々な学校の先生方には、研究に関して大変貴重なご助言やご指導を日々いただいております。また、北海道大学の学生・大学院生をはじめとした方たちは急にブラッと現れる私を温かく受け入れてくださり、研究の現状や楽しい時間をいつも提供してくれます。他にも数えきれない多くの方に支えられてさみしがり屋の私の生活は成り立っています。本当にありがたいです。なかなか全ての方に想いを伝えられないので、この場を借りて感謝の意を伝えたいです。…なので読み飛ばさないで欲しいな～。

## 事務局より

安部 久貴（北海道教育大学岩見沢校）

平素より大変お世話になっております。一昨年度より当学会幹事として事務局業務を担当しております、安部久貴（北海道教育大学岩見沢校）と申します。

平成29年度の本学会の事業と致しましては、まず、5月20日（土）に臨時総会と話題提供発表が行われる予定です。臨時総会では、前年度の事業報告と決算報告および新年度の事業計画と予算案の審議が行われます。また、臨時総会後には、会員相互の情報交換と研究内容の深化を目的として、話題提供発表を開催いたします。これは、過去のデータの再分析結果、他学会などの発表と同一内容のものや構想段階のものも発表できる機会となっており、昨年度は6演題の発表がありました。今年度はより良い発表の場になるように、発表形式等を再検討しておりますので、臨時総会だけでなく話題提供発表にも奮ってご参加、ご発表頂きたく存じます。

次に、今年度は会長および理事等の任期満了に伴う役員改選が行われます。10月を目安に役員選挙に関する資料がお手元に届きますので、ご多忙のところ大変恐縮ではありますが、期限内に必ず投票して頂きますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、12月初旬には帯広畜産大学にて第57回学会大会を開催予定にしております。近年の学会大会は発表数が30演題を超え、大変盛況に行われております。発表申込みと抄録原稿の締め切りは、おそらく10月中旬頃になる見込みですので、お早目に発表のご準備を進めて頂きたく存じます。学会大会にて多くの会員の方々にお会いできますことを心より楽しみにしております。学会大会などに関する詳しい情報は、郵送にてお知らせするほか、学会HP (<http://hspehss.jp/>) に掲載いたしますので、随時ご確認頂けると幸いです。



### 編集後記

広報委員長として、本学会における広報とはどうあるべきか、ということを考える余裕もなく1年が過ぎてしまいました。その主な活動は、このニューズレターの発行と学会ホームページの運営となっておりますが、そのあり方については広く会員の皆様のご意見を頂戴したいところであります。

さて、本号では酪農学園大学で開催された学会大会の様子をお伝えすべく編集を進めて参りました。木の温もりあふれる会場は、いくつかの写真から感じ取っていただけるものと思います。また、食材にこだわった懇親会のお料理はグルメな先生方の舌を唸らせるものでした。さらに本大会を支えていただいた酪農学園大学の学生さん方も、ランチの配布や説明、アンケートの呼びかけなど、笑顔の中にも誇りを持って活動している姿に感心させられました。

会場校の特色がハッキリと表れた大会であり、食という窓口から体育・スポーツを深く考えることが出来たのではないのでしょうか。研修館という建物の中で、すべてのプログラムが進行しましたが、コンパクトな建物がまた参加者の距離感を縮めてくれたものと思います。

さて次回の帯広畜産大学では、どんな大会になるかとても楽しみです。会員の皆様には、都合を差し繰って、多くの方を誘ってご参加いただければと思います。

広報委員会委員長 小出高義



北海道体育学会 公式ホームページ <http://www.hspehss.jp/>

(HPアクセス数 2015/12/18 13時 :3780、2016/12/21 15時 :8808)



